

佐賀縣の地理

——特に人口と地區に就いて——

小 藺 榮

地理學の發達は地誌研究の進歩に待つことが明らかとなつた。地理學の職能は地表の諸事象を、地域によつて配列説明することに存する。本邦には未だ、地方の地理學的説明を試みたものは極めて少く、而も日本全地域に互つてあるものはない。全地域即ち日本を單位とした詳細な地理學的研究には、各地方の地域的研究を可及的詳細にすることが、先決問題である爲であらう。

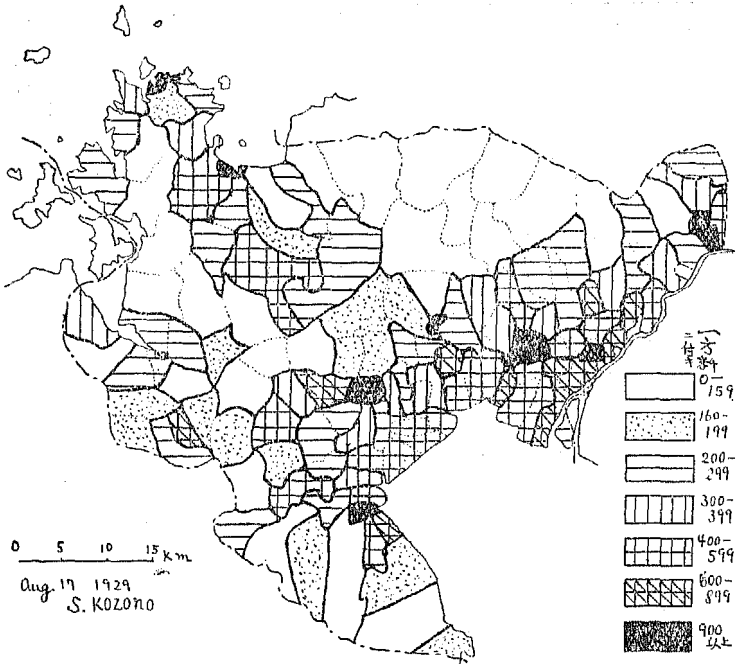
此の意味で、佐賀地方の研究を始めたが、未だ研究の方向さへも明らかにすることは出来なない。然し、地方研究は同好の徒の協力によつて遂行されるものと思考するが故に、蒐集した資料の一部を報告して、諸先輩の御指導を仰ぎ進路の一里塚としたい。

一、人口密度

第一圖は佐賀縣市町村別人口密度分布圖である。昭和元年十二月末日現在の統計を用ひたのは、他の圖表との關係を考慮して便宜であると思つたからである。最低階を百六十人未滿にしたのは當該年度、内地全體の平均密度百五十九人との比較に便せんとの試である。第三階二百九十九人迄は、本縣平均密度二百八十人と近似であつて、各市町村分布状態の比較を思考した面積は五萬分一地形圖の圖上測定をなし、東・西松浦郡の大部は要塞地帯なる爲五萬分一地形圖を所有せず、遺憾ながら二十萬分一地形圖によつた。可及的正確を期したが縣統計書による面積と五方料内外の廣狹を示す郡があつた。沿

第一圖

佐賀縣の地理



人口密度分布圖 (市町村別) 昭和元年十二月末日現在

岸附屬の島嶼は、誤差の大なるべきを慮つて、縣統計書の島嶼人口を當該各町村から除外し、面積の測定、随つて人口密度の決定を差し控へた。故に、各町村人口密度の決定には多少の遺憾な方法を含むであらうが、地理學的研究には尙ほ多くの價値を認め得ると思ふ

(註1)

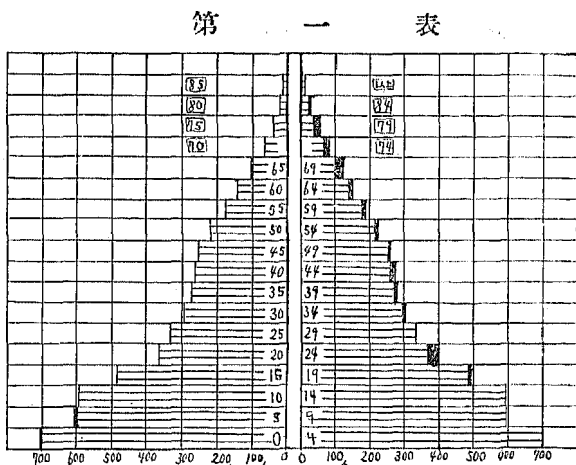
人口稠密な地方は、筑紫平野一帯及唐津地方、武雄温泉・有田陶工地・伊萬里港附近等である。其の中、筑後川下流右岸地方は殊に稠密で蓮池村では九百四十三人を算する。(註2、註3)

脊振山地一帯・東松浦半島西部・多良岳火山裾野地方は稀薄にして、就中、脊振村は面積六十一方町を越へ、人口は三千三百人に

達せず、密度五十三人である。

註1、面積の誤差は(東松浦郡の小町村数ヶを除く他は)極めて小さいと思ふ。然し各町村別の精確な数字の列擧は差し控へる。

同年齢より
各、超過する



人口構成 (總數一萬二付キ大正十四年十月一日)

註2、石井逸太郎は奈良盆地農村人口飽和の密度を一方

里一萬とした。呼子村は面積の小なる爲に測定に誤差が多いかも知れない。

註3、一方軒九百人以上の町村は次の通りである。

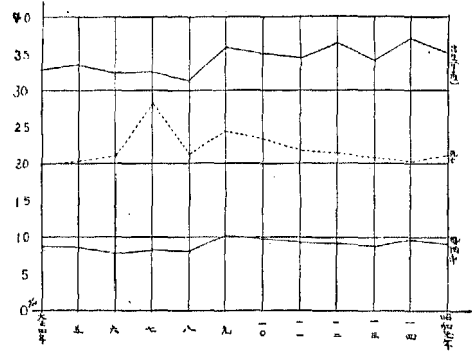
- 伊萬里町 一、六二七 大町村 一、一九〇
- 唐津町 四、八五〇 島栖町 一、〇二六
- 佐賀市 四、四五二 鹿島町 九七五
- 小城町 二、一一〇 蓮池村 九四三
- 呼子村 一、二四〇

二、人口構成附人口動態

第一表は大正十四年國勢調査當時の佐賀縣男女別年齢別人口構成である。出生兒から九年までは男、同年歳の女を超過するも、十五年以上は女多く、二十年より二十四年、四十年より四十四年及び五十年以上に於て殊に甚だしい。此の現象は第一圖と、近來盛になりつゝある海外出移民等を考慮すれば、幾分明らかとなるであらう。(註1、註2)

次に吾々は人口動態研究をなさねばならない第二表によつて、大正四年より昭和元年に至る

第二表



人口動態

(出生, 死亡, 婚姻)

十二ヶ年の佐賀縣出生・死亡を點檢すれば、人口千に付き、出生に於ては三十三弱より三十五強迄漸次向上し、死亡も大正七年流行性感胃の場合を除いても少しく向上してゐる。然しながら、出生の向上に、死亡の向上は及ばないから自然増加率は漸次向上する傾向がある。婚姻率は出生死亡と密接な關係あるを明示する爲に併

佐賀縣の地理

記した。(註3、註4)

註1、人口の多い筑紫平野の農業地は、第二圖によつて示される様に現住人口は本籍人口に對して少く、唐津炭田地方は本籍人口よりも多くの住民がある。然し炭田地方は一部分であるから全體の人口構成に及ぼすことは小さい。

註2、昭和元年に於いて、女を百とすれば男は本籍人口に於いて一〇〇・二二、現住人口に於て九七・〇四である。又現住人口の趨勢は次の如くである。

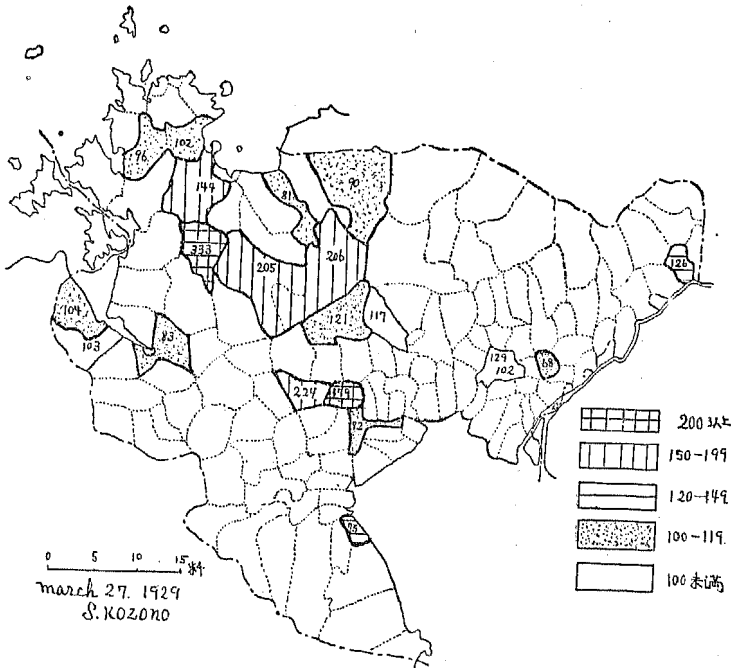
- 明治四十四年 六八六、〇八二人
- 大正五年 七〇五、五八九
- 十年 六八五、二八四
- 昭和元年 六七七、二七〇

註3、戦後好景氣の時には婚姻率、出生共に向上した。流感によつて多く死亡した後に婚姻率は向上し、隨つて出生も増加した。

註4、出入寄留人口(大正十年)

- A、他 出 二四四、四六〇 内、縣内他市町村七
九、四二二 臺灣 五、九六一 朝鮮
- 一三、六七六 外國 五、四〇一 縣外(國
内)其他 一四〇、〇一一
- B、入寄留 一二七、四九八

第二圖



現住人口ノ本籍人口ニ對スル百分比
 (町村別) (昭和元年十二月末日 數字大正十年末)

以上の人口状態を、今少しく明瞭にする爲に第二圖を作成した。昭和元年末現住人口六十七萬七千二百八十人に對し、本籍人口は八十四萬百七十三人である。即ち本籍人口の八十%五九が現住人口である。

最も多いのは東松浦郡北波多村の二百二十三%及び、杵島郡大町村の二百四十五%である。前者は相知村と共に唐津炭田の相知、芳谷炭坑の所在地であり後者は杵島第三坑の稼業地である殊に大町村は近年人口の増加著しく、炭坑景氣を物語るものと思はれる。此の夏から杵島第

三、現住人口と本籍人口

四坑も開坑され、昨年末信號所から昇格した大町驛は北方驛の繁昌を完全に奪はんとしてゐる次に現住人口百%以上の町村を列記して置く。

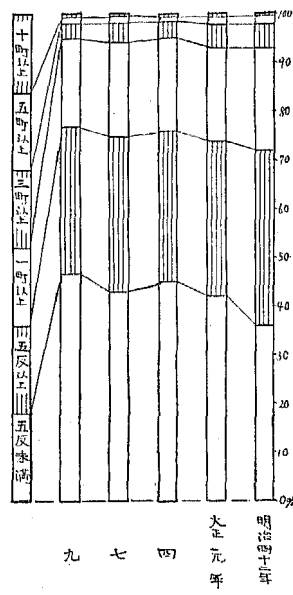
1、大町村	二四五・五%	炭坑地
2、北波多村	二二三・九	炭坑地
3、唐津村	一八八・七	炭坑地・貿易港
4、相知村	一八〇・八	炭坑地
5、嚴木村	一七〇・九	炭坑地
6、北方村	一五八・六	炭坑地
7、鳥栖町	一二一・九	鐵道要地・工業地
8、濱町	一二〇・九	稻荷門前町
9、北多久村	一一七・八	炭坑地
10、佐志村	一一七・五	唐津村炭坑・貿易港に接近す
11、大坪村	一一六・五	伊萬里町接續村
12、六角村	一一二・五	
13、濱崎町	一〇九・八	
14、壺野村	一〇六・〇	
15、有浦村	一〇四・九	
16、七山村	一〇二・五	
17、西山代村	一〇一・四	炭坑地

四、耕地

佐賀縣の地理

前述の人口状態に、農業地理的方面よりの一考察を附加するであらう。第三表は明治四十二年から大正九年迄の状態である。古き統計を用ひたのは比較的に精確と思はれ、次に示す幾多

第三表 耕地(田畑)所有ノ廣狹ニヨリ區別シタル戸數(縣農會調査)



の統計との比較研究の便を思つた。又、少くとも是の如き傾向は現在も認め得ると信ずるにもよる。註1
五反未満の所有戸數は十二ヶ年間に、三十六%から四十七%即ち二萬三千二百三十二戸から

三萬二千九百九十一戸に激増し、五反以上一町未滿の所有戸數は同じく、三十六%から三十%に、一町以上三町未滿は三十一%から十八%に減じた、三町以上五町未滿にあつては三千三百六十七戸から二千三百四十二戸に、十町以上五十町未滿は四百七十七戸から二百八十八戸に激減してゐる。五十町以上は四十四戸から三十四戸に減じたる如きも、大正元年には二十四戸に二年には二十三戸に減じ、其の後漸次増加しつ

ゝあるものゝ如くである。
 第四表は耕地耕作面積の廣狹による統計である。戸數總數は約二千六百戸を減じ、五反未滿及三町以上殊に五町以上の耕作戸數は激減を示し、五反以上二町前後の耕作戸數が増加する如き傾向が歴然としてゐる。

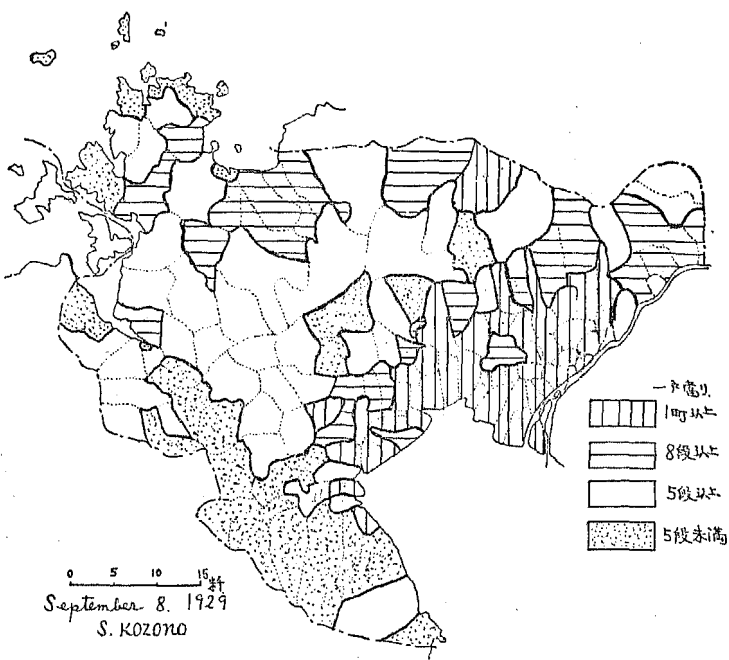
註1、縣統計圖集には土地の兼併の進行を否定するが如き記事がある。吾々の見解を以てすれば今俄に斷定し得ないのを遺憾とする。

第四表
 廣狹ノ畑(田)地耕作スル農家戸數
 別シタル區別ニヨリ

年數	五反未滿	五反以上	一町以上	二町以上	三町以上	五町以上	計
明治四十二年	三,四八四	二,八六五	一,三七九	五,八九九	一,五七九	三,三三九	七,〇六六
明治四十三年	二,五五〇	二,四七九	三,九八三	五,八四〇	一,五二六	二,九一五	七,〇〇五
明治四十四年	二,四九六	二,四四七	四,六三三	四,八九三	一,二七〇	八五八	七,一三〇
大正元年	三,六六六	二,六八八	一,四八三	四,六一	九七七	七〇	七,〇〇三
大正二年	三,六六一	二,六六一	一,四七三	四,一七六	九七七	七〇	七,〇〇六
大正三年	三,一四一	二,五〇〇	一,四八六	四,一〇六	一,〇二二	七〇	六,八六六
大正四年	三,二六五	二,六〇九	一,五〇七	四,〇九〇	一,〇七	七〇	六,九四五
大正五年	三,三〇一	二,七〇七	一,四六四	四,〇二六	一,〇八	七〇	六,八三三
大正六年	三,四〇〇	二,八七五	一,六八七	四,五五五	一,〇七八	七〇	六,九〇三
大正七年	三,三三六	二,八三〇	一,六八九	四,五七七	一,〇八四	七〇	六,八八九
大正八年	三,六六六	二,七九	一,六八七〇	三,七四五	九八三	七〇	六,四五三
大正九年	三,八七	二,四四七	一,六九〇	四,〇七一	一,一三三	七〇	六,四五五

第三圖

佐賀縣の地理



農家一戸當り田地分布 (町村別)

五、耕地 (二)

第三表・第四表の現象を、正確に認識せんとするならば、當然農家一戸當り耕地面積を考慮する必要があらう。

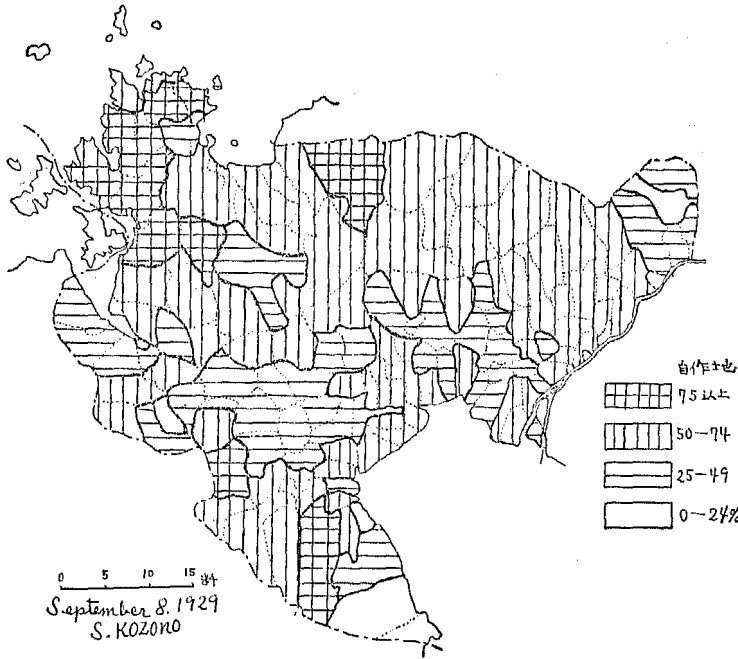
第三圖は大正九年における市町村別農家一戸當り田地分布である。五反を階級區別の數に用ひたのは異論はないと思ふ。八反は佐賀縣全部の平均七段九畝に近く、又、自作農考察の參考となるであらう。註¹

一戸當り面積の最も廣いのは筑紫平野で、就中小城郡牛津町は二町四畝に及び、郡平均では佐賀郡の一町一段五畝である。最も狭いのは東松浦半島の尖端の海岸町村及び多良岳火山裾野一帯で、中にも東松浦郡呼子村は一段歩に過ぎない。註²

第一圖と比較研究するならば、多

第 四 圖

地 球



第十三卷

第一號

自作地ト小作地トノ割合(田) (町村別)

六〇

くの興味ある事項を抜き出し得るであらう。其の中には地理學的研究資料として必要なものもあるが、詳細なる考察は差し控へる。

註1、平均して所有田地八段となる如き農村は自作農階級の多い農村と見てよいと思ふ。大地主のある村は特別であるが。

註2、呼子村は漁業によつて生活する者多く、半農半漁も多い。故に田地が最も少いからといつて生活が最も困難であるとは考へられない。

六、耕 地 (三)

第四圖は耕地—田地のみによつた—總面積に對する自作地—田地—の百分比を町村別に示した分布圖である。大正九年の統計である。第三表第四表、第三圖との比較研究によつて、第六圖を説明し、第七圖考察の方法の一つとなるであらう。

自作地が總面積の五十%に達しない地方は三養基郡東部、佐賀、小城兩郡南部、多良岳火山裾野及び杵島郡中部を主要なものとする。町村に就いてあぐれば、三養基郡田代村の十五%基山村の二十七%及び、藤津郡濱町の十九%、多

第五表 累年小作・自作田反別

年 數	田地總面積		自作反別		小作反別		總面積ニ對スル 自作地百分比
	反	町反	反	町反	反	町反	
明治四十年	五〇,二四、四	二六,一七、三	三三,四三、一	五、六〇、二	五		五
明治四十一年	五〇,七九、八	二六,五七、五	三三,四七、三	五、七二、二	五		五
明治四十二年	五〇,七四、五	二六,〇三、四	三三,五〇、一	五、七四、四	五		五
明治四十三年	五〇,八九、一	二七,七八、五	三三,〇六、六	五、八二、五	五		五
明治四十四年	五〇,七三、九	二六,三四、七	三三,〇六、二	五、七三、九	五		五
明治四十五年	五〇,三三、七	二七,八三、八	三三,五〇、九	五、三三、七	五		五
大正二年	五〇,四三、三	二七,八六、六	三三,六三、七	五、四三、三	五		五
大正三年	五〇,四六、四	二八,三六、六	三三,五〇、一	五、四六、四	五		五
大正四年	五〇,三三、四	二八,四七、七	三三,六三、七	五、三三、四	五		五
大正五年	五〇,四〇、三	二八,五五、一	三三,六八、二	五、四〇、三	五		五
大正六年	五〇,五〇、八	二八,五九、五	三三,七三、三	五、五〇、八	五		五
大正七年	五〇,六〇、八	二八,六六、七	三三,八〇、一	五、六〇、八	五		五
大正八年	五〇,六八、一	二八,七〇、四	三三,八六、〇	五、六八、一	五		五
大正九年	五〇,九六、九	二八,九一、一	三三,八六、八	五、九六、九	五		五
大正十年	五〇,九四、四	二八,八〇、八	三三,八〇、六	五、九四、四	五		五

良村の二十一%が最も小なるものである。註1 脊振山地一帯及び東松浦半島地方は概ね五十%以上に達することは注目すべき事項であらう。山地と云ふ特別な地理的環境に育成された住民は筑紫平野と異なる社會状態を建設し、此の如き異なる社會は現代文化の潮流に對して異なる反應を表はし、種々雑多の相反するが如き社會を生長せしめつゝあるらしい。

第五表は第四圖の狀況を歴史的に表現したものである。十五年間に於いて、田地總面積は二千五百八十一町歩増加し、小作地は二千五百九十二町五段歩増加した。換言すれば、總面積は五%の増加をなしたが、自作地は十一町五段歩を減少した。註2

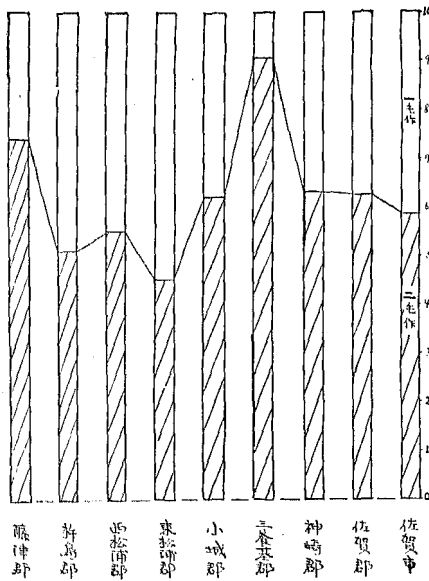
註1、有田町は田地は小作地七町八反あるのみにして自作地なし。伊萬里町は田地なし。

註2、昭和二年佐賀縣統計圖集によれば近年の傾向を樂觀的に記述してある。勿論該統計には耕地全部（畑などを含めて）を考察してあるが。

七、耕 地（四）

前述する所によつて、耕地特に田地に於ける概觀的の觀察をなしたが、尙二つの事項を附記するであらう。一つは耕地の利用状態の調査で

第六表 耕地利用状態（昭和元年度）



あり、他の一つは耕地擴張の可能地の研究である。

第六表は昭和元年度に於ける田地の利用状態である。此の百分比算出に當つては、桑・茶・果樹の作付地十五町餘及び不作付地七十一町餘、計八十七町歩を除外してある。

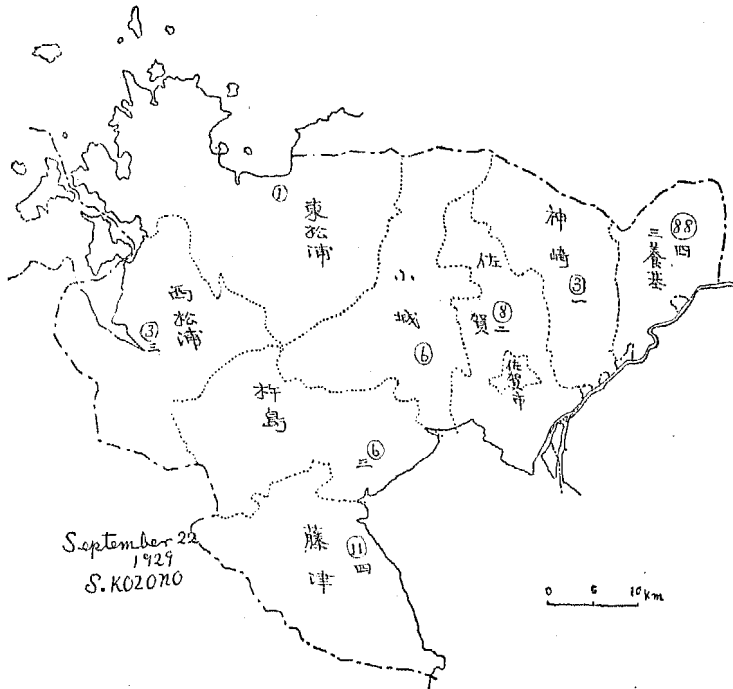
最もよく利用されてゐるのは三養基郡の九十%で、最も少いのは東松浦郡の四十五%九である。縣全體の平均は六十一%である。

八、有明海の干拓事業

筑紫平野は脊振山地から階級斷層によつて界されることは一般に認めらるゝ様である。筑後川及び其の支流の運搬・堆積作用は進行著しく土地の隆起作用も進みつゝある者の如く考察せらるゝ。此の現象は、二萬分一地形圖中原圖幅の舊綾部川扇狀地・綾部川の遷移點―緩急點―同じく鳥栖圖幅に於ける鳥栖驛近くで深さ四、五米の小谷を形成する小流の侵蝕形、甘木圖幅の西南隅太刀洗の小流の侵蝕谷等によつても實

第六圖

地 球



第十三卷

第一號

小作爭議件數地理的分布

(自大正七年至昭和三年) (日本數字、昭和三年度)

高 六四

得ル見込アリ』と。記事簡單なる爲に正確なる推論をなし得ざるを遺憾とする。

註1、緑川・菊池川の河口附近、長崎縣諫早町附近の干拓事業は省略する。

註2、「縣營干拓事業ナ」の七字は筆者の附記である。

九、小作爭議

人口密度、田地の所有・耕作・利用状態及び擴張見込等を考察した吾々は、必然的に耕地使用に關して生ずる社會問題として、第六圖を作成せざるを得なかつた。小作爭議は爭議の直接條件及び方法等は異なるとするも、最近の特別現象ではない事を承知するそれと同時に、地理的環境の

然らしむることの大なることも考察し得るであらう。

最も多く發生した三養基郡は十一ヶ年間に八十八回に及んでゐる。次は藤津郡の十一回である。日本數字で附記した昭和三年度の件数を除いて考へるならば、尙一層、一地方に集中することを見出すであらう。註1、註2

前述せる所、殊に第三表・第三圖・第四圖との比較考察によつて、大體の條件は明らかとなるであらう。併し、此に注意すべきは、三養基郡の争議件数は、小作地が六十%以上に達する鳥栖・麓・基里・基山・田代の一町四村に集中する事實である。最も多きは基山村にして、本年度も立毛立入禁止をなし相當紛擾してゐるらしい。基山・田代・基里の地は舊藩時代に對州宗藩の領地で階級制度嚴格を極め、上階級の壓迫の大きな地であつたと。其の爲に農民も根強き反撥心を有するもので、地主小作人各相下らず、争議はあらゆる手段を以つて行はれ、小學兒童の盟休・放火事件をも惹起した。併し、現在は幾分鎮

靜したるが如き外觀を呈するに至つた。註3

註1、昭和三年は稻熱病の損害全縣下平均九分に及び、其の爲に小作料減免の運動が争議となつた。而して近來は小作地返還の争議が多くなる傾がある。

註2、大正十三年は争議件數最も多く、五十七件に及び地主千二百六十八人、小作人二千五百五十一人、面積千五百二十五町の多數を示した。

註3、近來小作官の調停によつて解決するものも多くなつたが、生活難の深刻になると共に争議は増々深刻になるであらうと思はれることが多い。

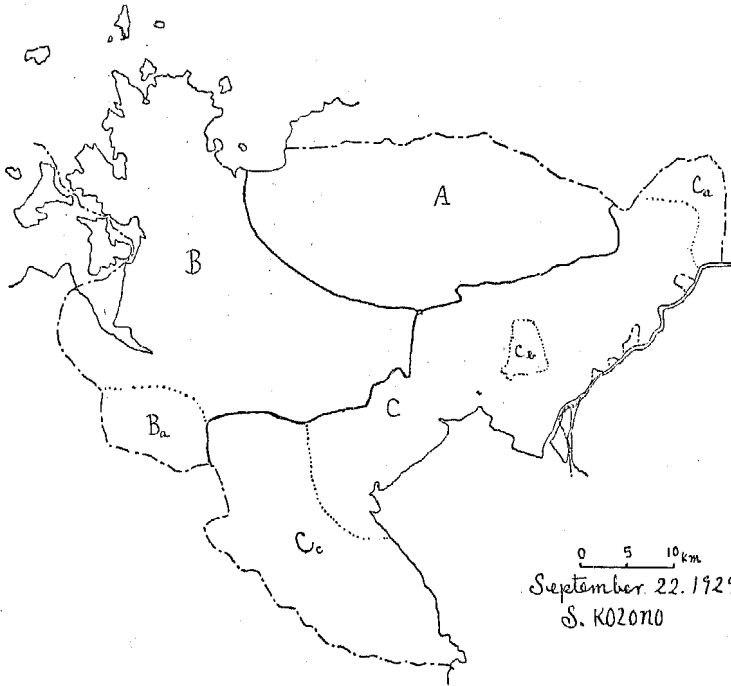
十、地理區

以上述べ來つた事項に、地形・氣候等の考查を加へて、第七圖を作成した。これは作業用考證であつて、將來の研究によつて不備を發見すれば最も速やかに改正するであらう。註1

1、脊振山地區(A)

東は神崎郡脊振村から、西は東松浦郡鏡村に至る十四ヶ町村に亘る地である。古湯では雨量二千三百九十五糎にして他の地區の千七八百糎に比して非常に多く、樹木よく生育し耕地は地形の關係にて極めて少く、人口密度も百六十人を越ゆる村は特例である。交通未だ不便の所多く、生業は農林業で

第七圖



地球

第十三卷

第一號

地理區

六六

ある。自作田地は皆五十%以上なるは注意すべきであらう。

2、松浦區 (B)

小城郡東多久村・杵島郡大町村から西北方、西松浦郡全部・東松浦郡の大部分である。地形・氣候に於いては相興大きく春振山地區と一致する地も少くない。海岸は溫度の較差最も少く、雨量千七百糎内外である。田地にて水利の不便な所あるは丘陵性山地、沈降海岸地形の地方として免れない。石炭産地として此の區劃を設けた。海岸には名護屋、呼子等の漁村もあるが細分を避けた。現住人口が本籍人口を超過する町村の大部分は此の區にある。

- 甲、松浦區 B
- 乙、有田區 Ba

有田町・有田村・曲川村の地である。有田川上流地域にして、平地狭く農産は少いが陶工地として一風景形態をなしてある。文久元年十二月行はれた舊佐賀藩の土地分配策の施行に支障を來した地である。

3 佐賀區 (C)

筑紫平野の米・裸麥地區の西半部である。第二・三圖及地形氣候を考慮すれば明瞭に脊振山地區・松浦炭田區と分れる。

雨量は松浦區と變らないが、溫度の較差は大きく、各月平均の較差は佐賀で攝氏二十三度六、絶對溫度の較差は攝氏四十一度である。東半部は植が多く一種の風景をなしてある地もあるが、作付段別・收穫高は漸次減少して、昭和元年には七百四十八町歩、五萬九千貫を少しく越すのみ。西南部は風景異なる所あれども亞區とした。

甲、佐賀區 C

乙、鳥栖・基山亞區 Ca

對州藩領地であつた所を主とする。自作地少く、人口稠密に製糸・製粉・石鹼・賣藥・清酒などの工場多く、又、交通の便利な地である。人情の相違も稍々著しく、爲に亞區を設けた。

丙、佐賀市亞區 Cb

舊城下町・縣治の中心地である。生産物は少く、消費地區をなしてゐる。

丁、多良亞區 Cc

多良岳火山裾野から嬉野・武雄に至る地區である。嬉野・武雄は温泉地で、多良岳火山裾野とは風景形態の異なる所があるも、今しばらく別區を設けなかつた。

火山裾野は耕地面積狭く、小作地の割合大きく水利不便にし

佐賀縣の地理

て農業牧牛地區を形成する。

註1、農業調査の統計が發表されたら、恐らく訂正せられなければならない。

十一、結 語

以上略述した所は地理的或は其の他の方面から考察して、幾多の誤謬缺陷を有するであらう單なる記述に過ぎない點も多い。そは一つには研究未だ緒に着いたのみで決定をなし得ざる箇條も多く、又、明かであつても其の必要を認めざる箇條もあり、他には將來の斷定を混雜せしめず、簡略に結論に達する様にせしむるにあつた。尙又、地理學的考察の柵の中に止めて、素りに結論の混亂を防がんと思つたのである。

次に參考文獻の主要なものをおあげる。

- 1、佐賀縣統計書
- 2、佐賀縣統計圖集 昭和四年發行
- 3、自作と小作 大正十年六月 佐賀縣内務部
- 4、舊佐賀藩の農民土地制度 小野 武夫
- 5、人口食糧問題 那須 皓
- 6、沖繩島出移民の經濟地理學病考察 武見 芳二

地理學評論四卷二・三號

7、我が植民地に於ける内地人入移民

地理學評論 五卷二號 武見 芳二

8、人口の増加率と活力指數に就いて

地理學評論 四卷五・六號 石田龍次郎

9、日本の地理區

地理學評論 三卷一號 田中 啓爾

10、日本の經濟區

地理教育 十卷四・六號 富士徳次郎

伊太利とところぐ

(二)

瀧川 規一

【フアシストの生立】

人間社會が流動性であることはベルグソンの流動哲學を研究しなくても吾人社會人は日常經驗する處である。流動して止まないのが人間社會の常態であり人間社會の諸相及び諸現象は海洋の波濤をもつて象徴することが出来る。一波消えてはまた一波生まる政治界經濟界及び思想界の何れを問はず社會の諸相は波瀾重疊の姿をとつて常に動いて居る。動く處に力が潛み激する處に力が顯はれる。波瀾は常に平衡に歸らんとし平衡は常に波瀾を孕む。激烈凄慘なる衝突反撃は相反する等價力の

衝突接觸に他ならないのである。斯くして現はるる結果は意外の如くにして意外ではない。吾人にとつて過去の事象より結論することが容易なるも未來の事件を卜占することの困難がある人心は屢社會の靜穩無事を飽くのであるが、小波瀾が絶えず且つ長年月に亘つて連續する時にも亦飽を覺える。さりどて大波濤の連續する時にも亦飽く。必竟するに適處適時の波瀾さへあらばよいのであるとしか云ひ得ないのであるが社會の現實相に對しては斯る抽象言は何等の價値を有しないのである。また社會の大波濤は破